



秋 鮭 や ユー カ ラ の 声 湧 く ご と し 佐 藤 映 二
 落 鮎 の 落 ち ゆ く と ころ 天 の 川 奥 山 源 丘
 ち ち ろ 虫 憂 き 世 の 夢 の 端 に 鳴 く 岩 井 かりん
 牛 は 伏 し 馬 立 ち 眠 る 草 雲 雀 大 野 今 朝 子
 生 れ し よ り 流 離 始 ま る 鰯 雲 志 摩 晴 樹
 尾 を 打 ち て 地 雷 探 す か 石 た た き 水 谷 亮 一
 百 日 紅 過 ぎ し 時 間 は ど こ へ ゆ く 長 尾 裕 美 子
 鯛 や 木 魂 は 己 が 樹 へ 還 る 田 中 優 子
 み ち の く の 山 黝 あせくろ き 厄 日 かな 若 尾 伸 子
 鷺 草 の 自 由 な 空 に あ こ が れ し 関 園 子
 向 日 葵 や 枯 れ て 磔 刑 像 の ご と 丸 山 貴 史
 風 少 し 夜 の に お い と な り 晩 夏 柿 谷 有 史
 天 の 川 鱷 の 粉 舐 め て を り 後 藤 行 雄

流星 や そ の 一 瞬 に し て 敗 者 竹 岡 み ち 子
 バ ナ ナ 駄 目 秋 刀 魚 駄 目 駄 目 瘡 日 記 田 村 道 子

夏 果 て の 大 し て 意 味 も な き 指 輪 森 山 夕 香
 山 道 に 透 し 百 合 の み 真 新 し 木 幡 忠 文
 蜂 の 子 を 炒 り て 振 舞 ふ 老 教 授 樋 上 照 男
 美 の 極 み 巴 は 水 みづ 好 み し 月 白 ぞ 尾 関 英 正
 走 錨 びょうち て ふ 言 葉 知 り た り 初 嵐 金 子 圭 子
 草 の 乳 の 指 に 黒 ず む 敗 戦 忌 竹 内 京 子
 新 涼 や 手 染 め ス カ ー フ 聴 ゆき 色 宮 岡 光 子
 新 酒 酌 む 今 宵 あ か る い 自 暴 自 棄 三 品 吏 紀
 き つ ね の か み そ り な ぜ 武 器 を 捨 て ら れ ぬ 松 井 弓
 あ す へ 明 日 へ 東 雲 草 の 蔓 自 在 石 井 紀 美 子
 テ レ ポ ー テ ー シ ョ ン 足 高 蜘蛛 は 殺 さ な い 斉 藤 す み れ
 次 の 世 へ 句 誌 を 届 け む 星 降 る 夜 池 間 キ ョ 子
 爽 や か や 笑 顔 は じ け る ブ ー ケ ト ス 濱 野 洋 子
 初 秋 刀 魚 あ い や 節 な ど 口 ず さ み 長 瀬 栖 子
 刈 田 に て 藁 焼 く こ と の 忸 怩 た り 西 澤 よ し 子

巻頭言「柳田邦男文庫」が信州大学中央図書館に設けられ
ことはたいへんうれしい。開設は来年になるが、一九七〇・
八〇・九〇年代のノンフィクション関係の図書文献が散逸し
ないでまとめられ、閲覧できることは後世への貴重な宝物で
ある。書物には「永遠の青春」が託される。柳田邦男先生の
ご英断に感謝申し上げるとともに、「岳」誌友の目に見えな
い無限のご支援を貴重なものと感じている。

秋鮭とユーカラの声と 感応する抒情の発見

宵から夜へ。産卵を終えた鮭が落ちてゆく。この世の川が
天上の天の川にそのまま流れ込む幻想に惹かれた。伊豆辺の
清流に懸る銀漢はまさにミルキーウェイ。遊び心を楽しませ
てくれよう。

落鮭の落ちゆくところ 天の川 奥山 源丘

ちちる虫憂き世の夢の端に鳴く 岩井かりん

夜ごと蟋蟀の音に揺さぶられながら、どこで鳴いているの
かあてどなく聞いていた。必死であるが、投げやりとも、或
いは楽しんでいとも聞こえる。ちちる虫の音色が「憂き世
の夢の端」からとは巧みな探索だ。この世の憂きの捨てどこ
ろ。それが夢の端とは訝えた気づきである。

牛は伏し馬立ち眠る草雲雀 大野今朝子

美ヶ原高原でも大阿蘇でも都井岬でもいい。草雲雀がフイ
リリ、リリと鳴く秋はいよいよ短い。構図が明快で快い。

鷺草の自由な空にあこがれし 関 園子

鷺草は朝に白鷺が羽搏く可憐なさまを見せ、青天に憧れる
が、夕べにはたちまち落胆、羽を閉じてしまう。美しい花に
似合わず短気なのではないか。鷺草よ大志を持って。

向日葵や枯れて磔刑像のこと 丸山 貴史

枯向日葵はキリストの十字架を背負った姿のようだ。比喩
にしないで、直叙表現でもよい。ウクライナ戦争が長引いて
いる。すでに言われているであろうが、改めて枯向日葵の出
番を作りたいと思う。

風少し夜のおいとなり晩夏 柿谷 有史

暑い大阪の夜に僅かに風がある。「夜のおい」に切ない
ほどの実感がある。有史君は視覚がご不自由だけに、嗅覚が
鋭く働くのであろう。私の推奨する地貌が捉えられた作であ
る。

今月の秀句

秋鮭やユーカラの声湧くことし 佐藤 映二

ユーカラを聴いた体験を思い出している。明るく軽や
かであった。秋鮭の産卵前の静かで必死な容姿とユーカ
ラの神謡の放下した明るさ。炬燵を棒で叩き調子をとり、
ポイヤウンペ（少年の英雄）の武勲を物語っている悠久
への誘い。内実はわからないが、天へ捧げる淡白な感動
があった。

生れしより流離始まる 鱒雲 志摩 晴樹

ふるさととは何処。どこから来てどこへ行くのか。流れゆ
く鱒雲よ。私も鱒雲。「流離」という切ない漢字があったば
かりにこの世は哀しいことになってしまった。そんな感慨句。

尾を打ちて地雷探すか石たたき 水谷 亮一

大戦の残留物、かつてばら撒かれた地雷が列島の各地で爆
発している。あたかも、平和ボケした令和の民が戦後八十年
の原点を忘れないよう、警告か。鶉鴿は元氣、不発弾でも見
つけてくれるのか、こまめに石を叩いて。ご苦労さん。

百日紅過ぎし時間はどこへゆく 長尾裕美子

ぼっちり目を開き、中空を脂肪に染めている百日紅。私の
来し方の時間はどこへいったのか。生きものの時間よ。

蛸や木魂は己が樹へ還る 田中 優子

木から抜けた木の魂は中空を浮遊しながら音という空気の
振動を運ぶ無償の仕事をしている。秋も深まり蛸が鳴く頃
になると、木魂も母なる木に戻りたいと思うのであろう。着想
が優れ、愛情がある。

みちのくの山駒き厄日かな 若尾 伸子

今年の東北地域は秋になっても残暑厳しく、晩夏の趣きだ。
「山駒き」とは二十日を迎えても鬱蒼たる妖気が立つ気配
を捉え確かな手ごたえがある。

天の川鼈の粉舐めてをり 後藤 行雄

大胆な作である。天の川に鼈でも浮遊しているのか。逢瀬
を思い、体調不良を立て直そうと、鼈の粉を舐める。涙ぐま
しい努力がどこかおかし。俳味がある。

癌罹患の衝撃を乗り越えて「癌日記」をつける壮絶な決意

バナナ駄目秋刀魚駄目駄目癌日記 田村 道子

正木ゆう子に「癌くらなるわよと思ふ赦すすき」『玉響』
がある。それを受けて「癌くらなるなつたわ飛蝗高く跳ぶ」と
詠む作者。掲句は医師から食べては駄目なものをいわれた。
それがいづれも作者にとり好物である。心は慟哭でも会話こ
とばは平常心。「駄目」を遊戯の囁し言葉のように繰り返す
剛毅さに感銘する。あす入院、しかも句集を出す用意にも入
る。大丈夫、大丈夫と私は心から声援を送る。

夏果ての大して意味もなき指輪 森山 夕香

指輪への感慨に驚いた。私は男性であり、指輪への関心が
ない、お洒落気のない平凡な人間なので、女性のさばさばし
た言葉にたじろいだ。「夏果て」が季節の哀感を超えた哲学
的な深みを持つ。指輪を掌に転ばして、咬いた思い。人生再
出発の決意のような。これは私の勝手な直感にすぎない。

山道に透し百合のみ真新し 木幡 忠文

四十代半ばの作者。感性による選択が鋭い。忘れたい透
し百合。新しいとの判断は青春の判断だ。私も十七歳の高校
生の時期に当時の木曾馬籠で「縁のなき地に来て向日葵のみ
美し」と詠んだ。藤岡筑郵先生が○をくれた。勝手な孤独感

が生きる支えであったとは今になっての回想である。

蜂の子を炒りて振舞ふ老教授 樋上 照男
実にいい先生ではないか。例えば、老教授自慢の山荘での小宴。自ら酒の肴に蜂の子を炒って振る舞う。物語には良き時代の師弟の慈しみが感じられ、最高である。

美の極み 巴水好みし月白ぞ 尾関 英正
芸術家俳句。大正から昭和にかけての浮世絵師、版画家。郷愁の画家。川瀬巴水の絵は端正な中に情味がしみじみと胸を打つ。波濤の果ての富士を描いても松に月の平凡な構図でも懐かしさが醸し出される。巴水に耽溺した歳月を懐古した。私は「月白」から秋の時間を感している。

走錨てふ言葉知りたり初嵐 金子 圭子
船の錨が海底から外れ、船が海上に流されるのが「走錨」。

今月の秀句

流星やその一瞬にして敗者 竹岡みち子
どんな場面を想定したものか。流星が闇に消えるさまを思えば敗者のイメージが浮かぶ。鮮やかな句なので、写生句を超えて、人の世のあれこれを連想する。流行とはこういうものともいえる。そう思えば掲句は底力のある生き方ももくもくと積み重ね、世の褒貶に捉われない人物像が思い浮かぶ。毅然としている。あえていえば、修羅場に生きる決意。

あすへ明日へ東雲草の蔓自在 石井紀美子
朝顔である。その自在な蔓に驚嘆。私も朝顔好き。気づきは盛んな時期が短いこと。あすはいい花を、明日はどんな花をと期待したのであろう。

テレポーテーション足高蜘蛛は殺さない 斉藤すみれ
瞬間移動という超能力のこと。二〇二二年ノーベル物理学賞受賞の「量子テレポーテーションのゆくえん」(アントン・ツァイリンガー著)は読んでいないが、すみれさんが注目する足高蜘蛛には興味がある。光の粒の量子間で遠隔地でもたちまち反応し合う原理にアインシュタインは悩んだという。私はアインシュタインではないので、知りたい人はすみれさんまでどうぞ。専門の宮地良彦先生に聞けないのが残念。

次の世へ句誌を届けむ星降る夜 池間キヨ子
過日逝去された宮古島の三島信子さんへの追悼句である。同島に住み切磋琢磨した親友。満天の星空を見上げての思い。見えますか信子さん。

爽やかや笑顔はじけるブーケトス 濱野 洋子
「幸せのおすそ分け」。花嫁が未婚の女性に投げるブーケ。ものの本によると十四世紀のイギリスの風習からとか。着実な作者。栃木勢がこのところ小誌活性化の底力になってくたさる。感謝。組織作りがいい。研修部長、宣伝肝煎りと、関東平野の一角から他を凌駕する勢いだ。「岳」の「ブーケトス」。

初秋刀魚あいや節など口ずさみ 長瀬 栖子

秋の初嵐を配し、現実をリアルに見つめた作者の堅実な作。ひとつ句境が深まり、内実の充実が感じられる。佳句。

草の乳の指に黒ずむ敗戦忌 竹内 京子
草むしりをしながらの細やかな気づきが七十九年前の敗戦忌を踏まえることで手応えのある句になった。いかにも俳句でなければ掬い上げられない詩情である。巧みな作者。

新涼や手染めスカーフ 鴨色 宮岡 光子
平安時代には袍(いわゆる背広)の色に位階により定めがあった。天皇に面会できるお公家様以上は深い紫・赤・黄檗染などの鮮やかな彩色(禁色)を用いるが、以下庶民に至るまでは駄目。聴色とは誰でも用いているが、例えば、淡い紫はよい。掲句はスカーフの色。ああ涼し気。気が利いている。ドラマ「光る君へ」が話題になり、古典の世界がぐっと身近になったのであろう。

新酒酌む今宵あかるい自暴自棄 三品 史紀
「あかるい自暴自棄」が出色の表現。ことばが思考を深めて生き方をリードする。帯広在住の若者よ。わが学生時代は論理学の命題「弁証法」の深い理解こそ生きる支えであった。矛盾を如何に昇華させることができるか。地面は叫び、空ははてしなく広い。

きつねのかみそりなせ武器を捨てられぬ 松井 弓
ヒガンバナ科。百合や野萱草に似た華やかな花。真夏に咲く。この群落に囲まれるだけで、反戦の思いが高まる。武器よさらば。戦争仕掛け人へきつねのかみそりを束ねて贈れ。そんなシュプレヒコールが聞こえる。

美声で鳴らした飛驒高山の忘れがたき姉さん。あいや節の高調子が耳に響く。あいやーあいやー。貴重な初秋刀魚はすぐ焦げる。高山勢が着実に盛り返してくださることを祈る。
刈田にて藁焼くことに忸怩たり 西澤よし子
はっとした。藁こそ稲の元締め。刈田に返すのに焼くのはつらい。この気持ちこそ田作りにいのちをかける農民の本心であろう。松本郊外、現東筑摩郡筑北村乱橋在住の作者。「かけはしの記」の旅で、子規が乱橋に泊まるのが明治二十四年六月二十七日。「塩辛い昆布の煮物が出て、咽喉に通らない」とある。かつて、善光寺西街道筋の主要な宿場であった乱橋。西澤よし子、日出樹親子が元氣。

他に推薦候補作をあげる。
手繰り寄する屁糞藁のいとしかり 金井 勝代
鎮魂の亭午の花火百日紅 佐藤 恵子
台風の近づく空の粘つき 小口 洋子
ことしの夏はといつかも言つたよな 遠藤 靖子
羽抜鶏武器も持たずに陣す 石川 定雄
ががんぼが壁の向うを知りたがり 関 禮
深山のせせらぎのごと夏料理 牧野真知子
殿の花火の音の寂寥と 白井小夜子
吾亦紅孤高や群れず争はず 成瀬 嘉一
戸焼く能登の漢よ風は秋 有手 勉
花縮く砂荒ぶる心鎮めけり 佐藤たまき
立秋や夜空とふ名の和菓子切る 北沢 雅子